

東シベリア・スントルハヤータ山地における氷河および気候の観測

Observations of glaciers and climate in Suntar-Khayata Range, Eastern Siberia

高橋 修平 [1]

Shuhei Takahashi[1]

[1] 北見工大

[1] Kitami Institute of Technology

1. スントル・ハイアタ山脈と国際極年

1957/58年の国際地球観測年IGYには、南極・北極の両極域において各国が一斉に観測を行い、日本も昭和基地で南極観測を開始することになった。その50年後の2007/08年、第4回国際極年IPYとして各国は再び極域の観測を広域に行おうとしている。ロシアは、IGY当時、-70 という最低気温記録をもつ東シベリア地域、スントル・ハイアタ山脈地域で越冬観測を数年続けるとともに、氷河分布観測を精力的に行った。その後、南極・北極域においては観測が継続されたが、ここではほとんど観測が継続されなかった。しかし、この地域では貴重な50年前データと比較変化ができる重要性から、ロシア・アカデミー研究者から、観測を実施したいと申し出があり、科学研究費補助金・海外学術調査「国際極年における東シベリアの氷河分布調査および雪氷学的観測」としてこの地域の観測を行うことになった。

2. 2004年観測

2004年7-8月に、ヤクーツクから一旦インディギルガ川河畔の鉸山町ウスチネラに飛行機で飛び、ここからはボートでインディギルガ川で遡航した。途中、大雨による洪水のために身動きが取れず、4日間かけてオイミヤコンに到着。ここには冬には-72 になったという記念碑がある。オイミヤコン村からトムトル(ヤクーツク~マガダンのコリマ街道沿い)の30kmの間に気温計・降水計を5カ所設置した。

オイミヤコン村からは、ヘリコプターにより、スントル・ハイアタ山脈のNo.31氷河末端付近に着陸し、気温・風速・風向・日射・積雪深測定用自動カメラを設置した。

3. 2005年観測

2005年9月、前年に設置した気象観測装置を回収した。いくつかの温度計は紛失したが、概ね順調にデータ回収ができた。

冬期間最低気温が氷河地点では-40 前後なのにオイミヤコンでは寸-60 近くとなり、かなり強い大気気温逆転を示した。インターバルカメラによる積雪新観測結果によると積雪増加が冬の初めと終わりに大きくあり、後は変化しない期間が長いことが特徴である。

2005年ヘリコプターフライトにおける南部のNo.147,148氷河はこの地域最大の氷河であるが、近年その後退量が大きい。

この調査は科学研究費補助金・海外学術調査「国際極年における東シベリアの氷河分布調査および雪氷学的観測」の一環として行われた。

